

イメージで教える日本語の格助詞と構文

杉 村 泰

キーワード：格助詞、構文、イメージ、「に」、「へ」

1. 本稿の立場

一般に格助詞は（１）のように同一の形式に複数の意味役割が与えられることもあれば、（２）のように異なる形式に同一の意味役割が与えられることもある。通常日本語教育では、こうした格助詞の形式と意味の関係について、教科書に出てくる順番に一つ一つ教えていく。

- （１） a. 机の上に本がある。〈存在の場所（位置）〉
b. 私に子供がある。〈所有者〉
c. 映画を見に行く。〈目的〉
- （２） a. 彼に本をもらう。〈授与者〉
b. 彼から本をもらう。〈授与者〉

これに対し、本稿では Bolinger（1977）の「意味と形式の一対一対応の原則」に基づき、同一の格助詞にはなるべく単一の意味を求め、各意味役割はこのプロトタイプの意味から様々に拡張して現れたものであると考える。すなわち、（１）（２）の「に」の各意味役割はすべて〈着点〉というプロトタイプの意味から拡張したものであると考える。一方、同じ〈授与者〉をマークする格助詞でも、「に」は〈着点〉、「から」は〈起点〉という別々の意味に還元され则认为¹⁾。このような考えに基づいて教えると、学習者は格助詞の多様な意味役割を意味的ネットワークで理解できるため、機械的な暗記に比べて記憶に負担がかからずすむと考えられる。

杉村（1999, 2000a-b）では格助詞「に」、「から」、「と」、「で」、「まで」、「へ」のイメージ図を提案してきた。本稿ではこれを受け、「に」を中心に教育的な観点から考察する。

2. 「に」の意味

格助詞「に」には大きく分けて、①存在の場所・時点の表示、②一方向性を持った動きの着点の表示、③被動的行為の動作主の表示の3つの用法がある。それぞれの例を(3)～(5)に示す。

(3) 存在の場所・時点の表示

- a. 机の上に本がある / ない。〈存在の場所（位置）〉
- b. 私に子供がある。〈所有者〉
- c. 姉にバイオリンが弾ける。〈能力の主体〉
- d. 今日は10時に寝る。〈時間（時点）〉
- e. わが家は学校に近い。〈距離的な位置〉

(4) 一方向性を持った動きの着点の表示

- a. 机の上に本を乗せる / 並べる。〈位置変化の着点〉
- b. 映画館に行く。〈移動の着点〉
- c. 映画を見に行く。〈目的〉
- d. 社会人になる。〈変化の結果〉
- e. 彼に会う / 話す。〈行為の相手〉
- f. 彼に教える。〈働きかけの対象〉
- g. 彼に本をあげる / 私に本をくれる。〈受益者〉
- h. 彼に本を買ってあげる / 私に本を買ってくれる。〈恩恵の受益者〉
- i. 太郎は次郎に比べて背が高い。〈比較の基準〉
- j. 彼に恋をする。〈精神行為の相手〉
- k. 彼について行く。〈随伴の対象〉
- l. 政府は構造改革に取り組んでいる。〈行為の対象〉

(5) 被動的行為の動作主の表示

- a. 犯人に殺される。〈受身の対象〉
- b. 彼に本をもらう。〈授与者〉
- c. 彼に本を買ってもらう。〈恩恵の授与者〉
- d. 台風に家を飛ばされる。〈原因〉

しかし、国広（1986：199）が「に」は一方向性をもった動きと、その動きの結果密

着する対象物あるいは目的の全体を本来現わしている」と述べ、堀川（1988）が「密着の対象」を表すとし、山梨（1994）もプロトタイプの「に」は「収斂性、到達性、密着性、近接性」の制約があると言っているように、「に」の各意味役割は抽象化するといずれも何らかの〈着点〉を表していることに気づく。本稿ではこの〈着点〉を「に」のプロトタイプの意味であると考え（図1）。図1において矢印は何らかの動きを表し、右端の点は行為の結果の及ぶ〈着点〉を表している。矢印が点線になっているのは、「に」は行為よりも結果である〈着点〉に焦点の当たる表現であることを示すためである（この点で7節の「へ」と区別される）。

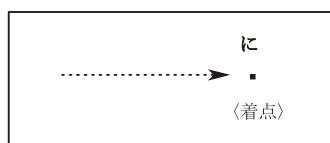


図1 「に」のイメージ

日本語教育でも上のような図を使って説明すると、視覚的に「に」のイメージが捉えられるため、学習者の理解が早くなるようである²⁾。その他の格助詞についてはすでに杉村（1999, 2002a-b）で論じているので、詳しい議論はそちらに譲ることにし、本稿では「に」と他の格助詞の使い分けを中心に論じることとする。

3. 「に」と「から」

格助詞「から」のプロトタイプの意味は行為の〈起点〉を表す点にある（図2）。この点で〈着点〉を表す「に」とは対照的である。

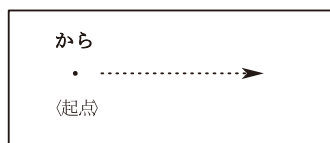


図2 「から」のイメージ

「に」と「から」は、(6)のように「に」が〈着点〉、「から」が〈起点〉を表すことが明確な場合には説明に困らない。しかし、(7)のように「に」も「から」も「本」の出所をマークする場合、なぜ「から」だけでなく「に」も使われるのかを説明するのは難しい³⁾。

(6) 彼がアメリカ に から 来た。

(7) 彼 に から 本をもらう。

この点について、日本語教育では「～にもらう」と「～からもらう」をパラフレーズに説明することがある⁴⁾。しかし、このように説明すると、後々「てもらう」構文を導入するときに「に」と「から」の文法性の違いが説明できなくなる。

- (8) 私は彼 に/ から 送って (貸して/ 言って/ 教えて) もらった。
 (9) 私は彼 に/ *から 掃除して (作って/ 書いて/ 会って) もらった。

これに対し、「に」と「から」を区別して考えると、(8)と(9)の文法性の違いが説明できる。「から」は移動の〈起点〉を表示するため、(8)のように情報や物の移動を伴う動詞につく。一方、「に」は主体から相手に向かって情報や物、恩恵を得ようと差し出す手の〈着点〉、すなわち密着性の〈着点〉を表示するため⁵⁾、(8)のみでなく移動を伴わない(9)でも使えると説明できる。このイメージを図3、図4に示す。

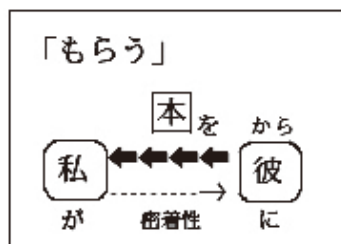


図3 「もらう」のイメージ

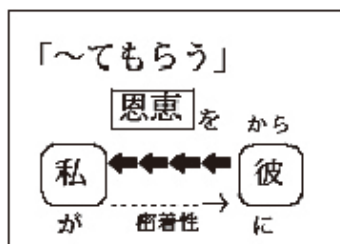


図4 「～てもらう」のイメージ

従って、「～にもらう」、「～に～してもらう」は「～に聞く」や「～に求める」のように主体から相手に向けて働きかけをする表現の延長として、「～からもらう」、「～から～してもらう」は「～から受け取る」のように情報や物が主体の方に移動してくる表現の延長として説明できる。

また、「に」は〈着点〉、「から」は〈起点〉に焦点が当たるため、「捨てる」は「(場所)に」、「拾う」は「(場所)から」と共起する。これを図5に示す。

- (10) 床 に/ *から ペンを捨てる。
 (11) 床 *に/ から ペンを拾う。

これに対し、「吊るす」は(12)のように「(場所)に」とも「(場所)から」とも共起する。実際、インターネットの検索エンジン Google (<http://www.google.co.jp/>) で検索したところ、「天井に吊るす」は139件、「天井から吊るす」は621件ヒットした⁶⁾。この場合、「天井に吊るす」と言えば「結わえる」や「かける」と同様に天井に接近するイ

メージで捉えられ、「天井から吊るす」と言うのと「下げる」や「放す」と同様に天井から離れるイメージで捉えられる。これを図6に示す。

(12) 天井 {に/から} 吊るす。

(13) 上 {*に/から} 吊るす。

ただし、「天井」のような具体的名詞ではなく、「上」のように漠然と方向を示す名詞の場合は、上から吊り下げるという意味で「上に吊るす」と言うことはできない。言うとなれば、「(食卓の) 上に吊るす」のように「何かの上方に(天井などから)吊り下げる」という意味で解釈される。学習者にはこの点に注意させる必要がある。

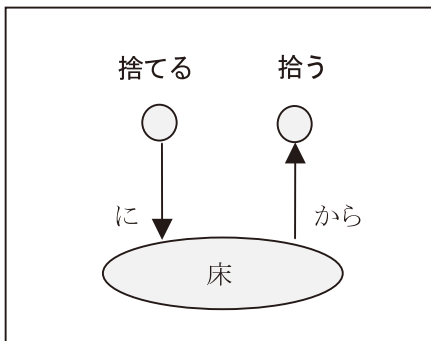


図5 「捨てる」と「拾う」のイメージ

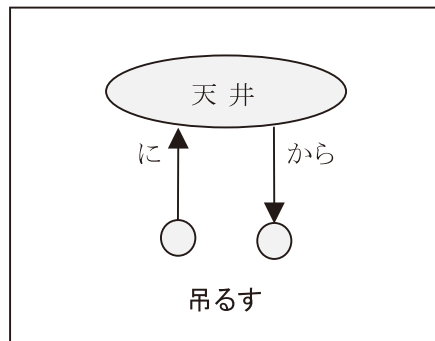


図6 「吊るす」のイメージ

次の(14)、(15)は同じ場面について描写されたものである。(14)には「上から上げる」、(15)には「下から上げる」とあり、一瞬紛らわしいが、(14)の「上から」は槽の上にいる動作主の行為の〈起点〉を表し、(15)の「下から」は引っ張り上げられる対象の〈起点〉を表すという違いがある。従って、「上から上げる」は図6のイメージで、「下から上げる」は図5のイメージで考えることができる。

(14) 「そりゃあ、やっぱり、上から、何かを吊ったんでしょうね。あの槽に、上から何かを下ろしたんだと思います」

「上から何かを上げようとしたのかもしれないわ」紅子はもう一度上を見た。
「この位置から、槽の上に何か重いものを引っ張り上げるために使った可能性だってあるのでは？」(森博嗣『人形式モナリザ』講談社文庫)

(15) 「下から上げた場合、槽の上で受け取る人間が必要だ。そうではなくて、槽の上にいる人間が、下から引っ張りあげるのに使ったんだよ」(同上)

4. 「に」と「と」

格助詞「と」のプロトタイプの意味は共同行為の〈相手〉を表す点にある（図7）。この点で一方的な「に」とは対照的である。なお、「彼と旅行に行く」の「と」も抽象化すれば〈相手〉を表すと考えられるが、「彼と結婚する / 争う」のような主体と対立する〈相手〉とはイメージが異なるため、〈連れ〉として〈相手〉とは区別して考える（図8）。

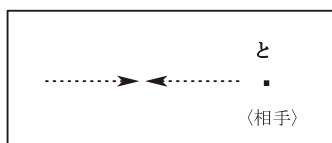


図7 「と」のイメージ1

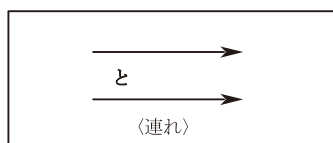


図8 「と」のイメージ2

「に」と「と」は、(16) のように意味の違いが微妙なときがある。このような場合は、(17) のように意味の違いが明瞭なものを順次提示していき、最後に上の図を示せば、直観的イメージで理解させることができる。

- (16) a. 彼 に / と 比べて背が高い。
 b. 彼 に / と 似ている。
 c. 彼 に / と 会う。
- (17) a. 彼 に / と ぶつかる（話す / 相談する / 約束する / 恋をする / キスをする）。
 b. 今日の朝飯はご飯 に / と 味噌汁だ。⁷⁾

5. 「に」と「で」

格助詞「で」のプロトタイプの意味は〈領域〉を表す点にある（図9）。この点で零次元的な「に」とは対照的である。

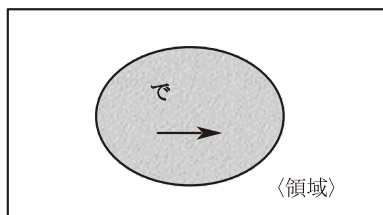


図9 「で」のイメージ

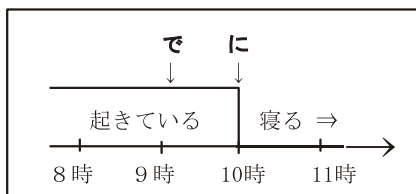


図10 「10時に寝る」と「10時で寝る」

「で」には(18)に示すように様々な意味役割がある。しかし、これらは全て菅井(1997:23)が「主格または対格に対する背景的側面の提示」を表すとしているように、単一の意味に帰着させることができる。この「背景的側面」を杉村(2002a)では簡単に〈領域〉と呼んだ。

- (18) a. 机の上で本を乗せる / 並べる。〈行為の場所〉
- b. 警察で事件を捜査している。〈行為の主体〉
- c. 今日は10時で仕事を終える。〈時間 (期間)〉
- d. 今日は10時で寝る。〈時間 (期間)〉
- e. 太郎はクラスで一番背が高い。〈比較の基準〉
- f. 台風で家を飛ばされる。〈原因〉
- g. 三千万円で家を建てる。〈数量的様態〉
- h. 木と紙で家を建てる。〈原材料〉
- i. 金槌と釘で家を建てる。〈道具〉
- j. バスで学校に通う。〈交通手段〉

「に」が〈着点〉を表し、「で」が〈領域〉を表すということは、次の表現を見るとよく分かる。(19)の「～に寝る」は横たわるという意味で解釈され、母がベッドに位置していることを表している。その点で、(20)の「～に寝かす」と並行的に考えられる。一方、(21)の「～で寝る」は寝るという行為がベッドという範囲内で行われることを表している。従って、「～に寝る」は図11のイメージを言語化したもの、「～で寝る」は図12のイメージを言語化したものであると考えられる。

- (19) 「そうだわ、その三四二号室に行けば分かります。あんなに苦しんだんですもの。いまでも母はそこに寝ているはずですわ」(桐生操『イギリス不思議な幽霊屋敷』PHP文庫)
- (20) お昼ごろ、さらに病状は悪化し、もはや物は言えずハアハア喘ぐだけになった。人々が抱えてベッドに寝かせようとすると、「いや、いや!」と叫んでもがきつづける。こうして午前二時ごろ、ついにエミリはこの世を去ったのである。(桐生操『イギリス不思議な幽霊屋敷』PHP文庫)
- (21) (いつ帰ることができるだろう……。ここのソファで寝てやろうか)と犀川は思った。(森博嗣『冷たい密室と博士たち』講談社文庫)

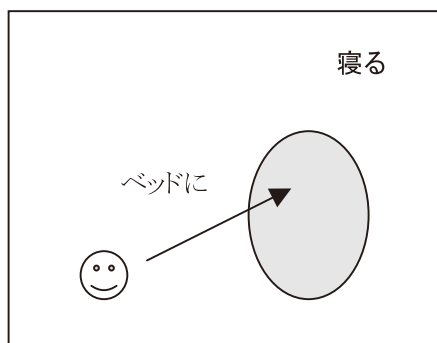


図11 「ベッドに寝る」のイメージ

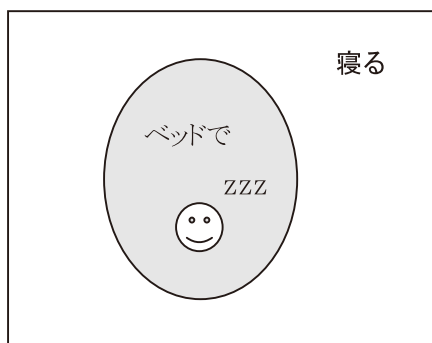


図12 「ベッドで寝る」のイメージ

また、(18d) の「10時で寝る」は超上級学習者でも習得していないことが多い。その場合、図10使って「10時に」は単に就寝時間を表すだけであるが、「10時で」はその前の起きている時間にも注目し、起きている時間の範囲をそこで区切る言い方であることを説明すればよい。もし学習者が留学生ならば、「3月に帰国する」は単に帰国の時期を言うのみであるが、「3月で帰国する」と言うとならまでの留学生生活を振り返り、それがそこで終わる感じがすると説明すれば、学習者も自分の身になって考えられるので理解しやすくなる。

このように「で」を〈領域〉として捉えると、(22a) の二つの表現の違いについても説明ができる。すなわち、「で」は広い意味で〈領域〉を表すため、「辞書なしで」は「一人で」、「一時間で」と同様に、「辞書あり」ではなく「辞書なし」という条件（領域）の下では新聞が読めないことを表している。一方、この「に」は広い意味で副詞的成分を作るものであり、「辞書なしに読む」は「ひといきに読む」、「徐々に読む」と同様に、新聞をどのように読むのかという様態を表している。(22b) も同様である。ところが、(22c) の場合は「砂糖なしに」とは言いにくい。これは「に」が「どのように」という副詞的意味を表すことから説明できる。「砂糖なしに飲む」はどのように飲むのかを表すが、「*砂糖なしにおいしい」はどのようにおいしいのかを表せない。そのため不自然な文となるのである。一方、「砂糖なしで」は「おいしくない」と感じるための条件（領域）を表している。そのため自然に使うことができる。(23a)、(23b) の「～ぬきに」、「～ぬきで」も同様に説明できる。

- (22) a. 辞書なし に/で は新聞が読めない。
 b. 砂糖なし に/で は飲めない。
 c. 砂糖なし *に/で はおいしくない。
- (23) a. お世辞ぬき に/で すばらしい。

b. サービス料ぬき {*/に/で} 5,000円だ。

ところで、学習者の中には(18f-j)のような「で」を〈領域〉で捉えるのに抵抗感を持つ人もいる⁸⁾。その場合は、用法ごとに〈原因〉の「で」、〈原材料〉の「で」と説明してもよい。ただし、後で「病で倒れる」と「病に倒れる」の違い、「木で家を作る」と「木から家を作る」の違いなどを説明するときのことを考えると、これらの「で」も〈領域〉からの拡張で説明しておく方が効率的であると思われる⁹⁾。

ただし、一文中に複数「で」格が出てくる場合は、〈領域〉が複数あるとすると説明がしにくくなる。その場合は、文全体の背景となるものを〈領域〉とするのがよい。例えば、(24)、(25)は「学校で」を文全体の〈領域〉とすると分かりやすい。

(24) 学校で 刷毛で 壁に ペンキを 塗った。

(25) 学校で 英語で 彼に 数学を 教えた。

なお、一般に「塗る」と「教える」はあまり一緒に教えられることはないと思われる。しかし、上の(24)、(25)の構文を図で表すと、それぞれ図13、図14のようになる。これを見ると、両者は共通のイメージで捉えられることが分かる。学習者に教える際にも、個々の格助詞の用法のみでなく、「(ある背景的領域)で(ある手段)で(ある着点)に(何か)をどうした」という構文全体の意味を教えるのがよいと考えられる。

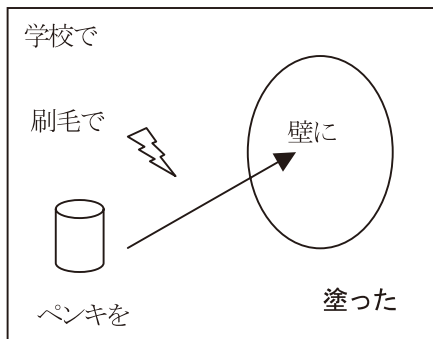


図13 「学校で刷毛で壁にペンキを塗った」のイメージ

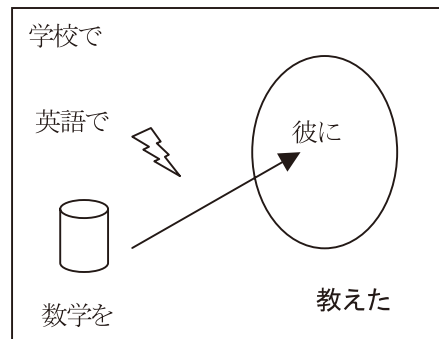


図14 「学校で英語で彼に数学を教えた」のイメージ

6. 「に」と「まで」

格助詞「まで」のプロトタイプ的意味は行為の及ぶ〈限界点〉を表す点にある(図15)。

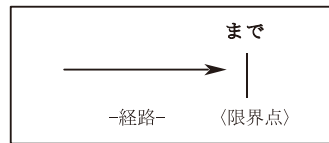


図15 「まで」のイメージ

「に」と「まで」の違いは、「に」が〈着点〉に焦点を当てた表現であるのに対し、「まで」は途中の経路を含んだ表現である点にある。従って、「走り続ける」のように途中の経路を含む場合には「まで」が使われ、「走りこむ」のように途中の経路を含まない場合には「に」が使われる。

- (26) a. マラソンでゴール まで / *に 走り続けた。
 b. マラソンでゴール *まで / に 走りこんだ。

7. 「に」と「へ」

格助詞「へ」のプロトタイプの意味は一次元的な〈方向〉を表す点にある（図14）。この点で零次元的な「に」とは対照的である。「に」の場合と違い、図12で矢印が実線で示されているのは、「へ」が経路を重視した表現であることを強調するためである。同じ経路を含む「まで」が行為の及ぶ〈限界点〉を表すのに対し、「へ」は行為の向かう〈方向〉、言い換えればベクトルを表すという違いがある。

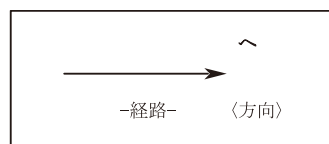


図16 「へ」のイメージ

〈方向〉と〈着点〉は共に行為の向かう先を表すため、しばしば混同されがちである。実際、(27a)と(27b)を見る限り、「に」と「へ」の差はさほど感じられない。しかし、(27c)のように行為の先がさらに伸びていく場合には「へ」が適格で「に」は不適格となる。このような例を見ると、〈着点〉指向の「に」とベクトル的な「へ」との違いが明らかとなる。

- (27) a. マラソンでゴール まで / *に / *へ 走り続けた。

- b. マラソンでゴール { *まで / に / へ } 走りこんだ。
 c. マラソンでゴール { *まで / *に / へ } 走り去った。

益岡・田窪（1987）や野田（1991）にもあるように、一般に〈方向〉を表す「へ」は〈着点〉を表す「に」と置き換え可能である。

（28）こちら { へ / に } おいで。の節は、ぜひお立ち寄り下さい。

（益岡・田窪1987：56）

しかし、杉村（2004a-d）でも指摘したように、「に」は「Aが/をBに」構文、「へ」は「Aから/をBへ」構文をとりやすいなど、両者には様々な性質の違いがある。このような違いは広告コピーのように述語を伴わず格助詞で文の終わる表現を分析するとよく見えてくる¹⁰⁾。杉村（2004c）では次の（29）、（30）の広告コピーについて、それぞれ異なる50人の日本語母語話者に「に」と「へ」のうち適当だと思う方を入れてもらう実験を行った。その結果、（29）のように「連れてって」という述語のある場合には「に」と「へ」が半々に現れ、（30）のように述語のない場合には圧倒的に「へ」の方が多く現れるという違いが見られた¹¹⁾。

（29）彼が待ってる新宿（ ）、5,100円で連れてって！

「に」：21人（42%）

「へ」：29人（58%）

（30）彼女が待ってる新宿（ ）、恋する切符、5,100円。

「に」：3人（6%）

「へ」：47人（94%）

（名古屋鉄道、「高速バス 名古屋－新宿線」の広告コピー）¹²⁾

これは述語がないと格助詞の意味が前面に押し出されるため、無意識のうちに「に」〈着点〉と「へ」〈方向〉が使い分けられるためであると考えられる。このように格助詞で終わる文を分析すると、格助詞の様々な性質がより一層明らかになってくる。

8. まとめ

森山（2003, 2004）は格助詞「に」の意味構造について認知言語学的観点から分析し、その「超スキーマ」の意味を「ガ格からの動力連鎖に対し独立性、主体性を持ってガ格

に対峙する性質(対峙性)」にあると指摘している。格助詞「に」には「移動の着点」と「移動の起点」(プロセス的把握)、「存在の位置関係」と「経験の主体」(非プロセス的把握)といった様々な意味があるが、これらは全てこの「超スキーマ」から導かれると考えるのである。このような格助詞の超スキーマ的意味は、とりわけ格助詞で終わる文に強く現れると考えられる¹³⁾。今後はこのような文も含め、格助詞および格助詞の連合からなる構文について、さらに分析していきたいと思う。

注

- 1) 山梨(1994:105)も「この種のパラフレーズの関係にある格助詞が、意味的にみて厳密に同値であるわけではない。一見したところ同値にみえる格助詞も、その表現主体の主観的な視点を反映している」と述べている。
- 2) 上海外国語大学の毛文偉先生もこれを試して、学生の理解が早くなったと語っている。
- 3) 池上(1981:121)は「論理的には〈起点〉的な表現が予想されるところに〈到達点〉的な表現が代用される」として、言語における〈到達点〉指向性という興味深い指摘をしている。
- 4) 日本語教科書『CMJ』(p.41)では、「～にあげる」の「に」は英語の“to”、「～にもらう」の「に」は英語の“from”で説明されている。
- 5) 実際には主体の働きかけが希薄な場合もある。その場合、「～が(～して)くれる」と意味的に隣接することになる。
- 6) 検索は2005年6月27日に、「吊るす」および「つるす」の辞書形について実施した。ヒット数は検索結果の最終ページにある「最も的確な結果を表示するために、上の○件と似たページは除かれています。」と書かれた件数の合計を示してある。
- 7) 「ご飯に味噌汁」と言えばご飯に味噌汁が添えられたイメージ、「ご飯と味噌汁」と言えば両者が対等に並んでいるイメージとなる。
- 8) 確かに次の(24)や(25)のように一文に「で」格が複数出現した場合は、いずれの「で」格も〈領域〉(または「背景の側面」)を表すと説明するのは感覚的に無理があるかもしれない。
- 9) 〈場所〉を表す「に」と「で」については、迫田(1998)、菅井(2000)、森山(2001)、浅山(2002)など多数の論考がある。教育的なわかりやすさから言えば、「に」は〈着点〉、「で」は〈領域〉という説明に加え、浅山(2002)の言うように「に」は「対象のありか」、「で」は「主体のありか」を表示すると教えるとよい。
- 10) 格助詞で終わる文の特殊性については、李(2002a-c, 2004)が記号論の観点から興味深い研究を行っている。
- 11) これは偶然ではなくその後様々な機会に調査しても同じ結果が出た。また、日本にいる上級日本語話者50人を対象に調査したところ、例(29)は「に」が25人(50%)、「へ」が24人(48%) (未記入1人)、例(30)は「に」が13人(26%)、「へ」が37人(74%)という結果となった。これは上級日本語話者も「に」と「へ」についてかなりの程度日本語母語話者と同じ感覚を身につけていることを示していて興味深い。上級日本語話者における「に」と「へ」の使い分けについては、杉村(2005)で論じている。
- 12) (29)、(30)は元の広告コピーではいずれも「へ」が使われている。

- 13) 李 (2002a-c, 2004) は、「今年、カール・ルイスと。」(Mizuno「スニーカー」)、「パソコンで、21世紀の日本語を。」(岩波書店、広辞苑 CD-ROM)、「お出掛けは、地下鉄、市バスで。」(名古屋交通局)などの例を挙げ、日本語では述語がなくても発信者と受信者の間で意味が伝えられる点に着目している。これに関しても、森山 (2004) の言うような超スキーマの意味から説明できると思われる。なお、「で」格で終わる文の場合、上の「お出掛けは、地下鉄、市バスで。」のように主題(「～は」)の部分が述語相当の意味を表している例が多い。これは菅井 (1997) の言うように「で」格が文の「背景的側面」を表していることと関係していると考えられる。

参考文献

- 浅山友貴 (2002) 「場所格ニとデの差異をめぐって」『東京大学留学生センター紀要』12, 東京大学留学生センター, 83-106.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』, 大修館書店.
- 国広哲弥 (1986) 「意味論入門」『日本語学』15-12, 明治書院, 194-202.
- 迫田久美子 (1998) 「誤用を産み出す学習者のストラテジー —場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分け—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 128-134.
- 菅井三実 (1997) 「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127 (文学43), 名古屋大学文学部, 23-40.
- (2000) 「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』20-2, 13-24.
- 杉村 泰 (1999) 「認知イメージに基づく格助詞の指導」『日本語学習者の作文コーパス: 電子化による共有資源化』平成8年度～10年度科学研究費補助金(基礎研究(A)(1))研究成果報告書(研究課題番号 08558020) 研究代表者 大曾美恵子, 110-130.
- (2002a) 「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1, 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科, 39-55.
- (2002b) 「格助詞で終わる文について —「～を/が～に」構文と「～に～を」構文—」『ことばの科学』15, 名古屋大学言語文化研究会, 235-250.
- (2004a) 「広告コピーに見る格助詞「へ」の用法について —シキシマは、Pasco へ、J-フォンは、ボーダフォンへ—」『言葉と文化』5, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻, 181-194.
- (2004b) 「格助詞「へ」に見る近未来都市」『言語文化研究叢書』3, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 49-64.
- (2004c) 「「彼女が待ってる新宿()、恋する切符5,100円」—格助詞「に」と「へ」のイメージ—」『平井勝利教授退官記念 中国学・日本語学論文集』、記念論文集編集委員会, 白帝社, 524-542.
- (2004d) 「格助詞で終わる広告コピーに見る「に」と「へ」の使い分け」『名古屋大学言語文化論集』26-1, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 39-54.
- (2005) 「上級・超上級日本語学習者に見る格助詞「に」と「へ」の使い分け」『名古屋大学言語文化論集』26-2, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 91-102.
- 名古屋大学総合言語センター日本語学科 (編) (1983) “A Course in Modern Japanese vol.2”, 名古屋

- 屋大学出版会。(=『CMJ』)
- 野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』, くろしお出版.
- 堀川智也(1988)「格助詞「ニ」の意味についての一試論」『東京大学言語学論集'88』, 東京大学文学部言語学研究室, 321-333.
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』, くろしお出版.
- 森山 新(2001)「認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い」『日本学報』49, 韓国日本学会, 95-106.
- (2003)「認知的観点から見た格助詞ニの意味構造」『外国語教育』10-1, 韓国外国語教育学会, 229-243.
- (2004)「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』, お茶の水女子大学人文科学紀要編集委員会, 51-66.
- 山梨正明(1994)「日常言語の認知格モデル6 意味のモード」『月刊言語』23-6, 大修館書店, 104-109.
- 李 欣怡(2002a)『美しい国へ。一格助詞で終わる広告ヘッドラインの一考察』名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士学位論文.
- (2002b)「格助詞で終わる広告ヘッドラインの述べかけ方」『平成14年度日本語教育学会第3回研究集会予稿集』, 日本語教育学会, pp. 93-96.
- (2002c)「格助詞で終わる広告ヘッドラインに隠されたもの 一文の「述べ方」という視点から」『ことばの科学』15, 名古屋大学言語文化研究会, pp. 5-22.
- (2004)「「パソコンで、21世紀の日本語を。」一格助詞で終わる広告ヘッドラインから連想される後続述語をめぐって」『平井勝利教授退官記念 中国学・日本語学論文集』, 記念論文集編集委員会, 白帝社, 662-680.
- Bolinger, D. (1977) *Form and Meaning*. London: Longman.